Y02a　教員養成大学における小学校理科天文分野の理解度調査

加藤美帆、福江 純（大阪教育大）

小学校教員において、理科の中でもっとも苦手とされるのが、小学校第 4 学年「月と星」、小学校第 6 学年「月と太陽」であるといわれている。このことから、教員養成大学において、天文分野の基礎的な知識を学生に定着させることが求められる。

また、先行研究では、教員養成系の大学の「月の満ち欠け」に関する理解度調査において、平成 10 年改訂学習指導要領の改訂の前後で正答率が異なるという結果が報告されている。これは、平成 10 年改訂の学習指導要領では、小中学校の天文分野（地学分野）の学習内容が大幅に削減されたため、正答率が著しく低下したのではないかという見解であった。一方、その後の平成 20 年改訂学習指導要領では、小中学校の天文分野（地学分野）が増加した。したがって本調査では、現在の学生の学力の定着を測る目的と、平成 20 年改訂学習指導要領の後の調査としての目的がある。

調査問題は、平成 20 年改訂小学校学習指導要領に従い、第 3 学年「日影の位置と太陽の動き」「地面の暖かさや湿り気の違い」第 4 学年「月の形と動き」「星の動き」第 6 学年「月の位置や形と太陽の位置」とし、本大学の学部生 1・2 年生（理科・非理科）を対象に調査を行った。その結果を報告する。